

弁納才一 『華中農村経済と近代化 近代中国農村経済史像の再構築への試み』

三品英憲

1. はじめに

本書の著者は、近代中国史研究が共産党革命中心史観から脱革命史への転換を本格化させつつあった1980年代後半に研究界に登場し、以後90年代を経て今日まで、農村経済史の分野における議論を一貫してリードしてきた。本書は、そうした著者が90年代半ば以降に発表した研究を集成し、さらに新たな研究成果を書き下ろして成った書である。本書を貫くテーマは、革命史とその理論的基礎となっていた発展段階論に対する批判、そして発展段階論を相対化する理論の模索であり、それゆえに、華中東部という中国の一地域に対する研究でありながら世界史的な議論の広がりを持っている。また本書の「双子の姉妹篇」とも言うべき『近代中国農村経済史の研究』（経済学部研究叢書12、金沢大学経済学部、2003年3月）と併せ読めば、著者の近代中国農村像の全貌を理解することができる。新しい世紀の近現代中国農村経済史研究にとって、本書が刊行されたことの意味は大きいと言える。こうした特長については後に詳細に述べるとして、まず、本書の内容を概観する。

2. 本書の概要

「序論」は、問題の所在を明らかにし本書の課題を設定する。すなわち、農村経済は中国近代史研究において重要な位置を占めているが、近代における農村経済の実態とその近代化過程については不明な点が多い。80年代までの研究は、中国農村を「半植民地半封建」構造の中で捉えるか、あるいは逆に西欧近代・資本主義的な意味での発展的側面を見出そうとしたが、いずれにしても西欧的な近代化・資本主義化過程との格差を中国経済の「遅れ」とせざるをえなかった。90年代以降に現れたのが中国固有の社会関係や社会構造を重視する研究であるが、ここでは、中国農村経済の「遅れ」の原因説明に力が注がれた。本書は、こうした現状を打破して中国近代史像を再構築することを目的とする。

第1編は、稲・麦・蚕糸・棉花を取り上げ、江南農村における在来の経済構造と近代的改良との関係について考察する。第1章「1934年の大旱害に見る地域差」は、34年の大旱害を

切り口に、浙江省の農村経済構造について明らかにする。34年の旱魃は浙江省北部（浙西・浙東）に大きな被害をもたらした。これは、この地域が米を購入していたからである。この当時、浙江省（特に浙東）には安徽米が多く移入されていたが、安徽自体が34年の旱害により移出力を失っていた。外国産米の緊急輸入も上海の米商人の反対によって遅れたため、浙江省は非常に苦しい状況におかれた。ここに稲麦種改良事業が本格化したのである。

第2章「稲麦種改良事業」は、浙江省を取り上げ、稲麦の改良事業が農村社会にいかなる意味を持っていたのかを考察する。30年代、浙江省では穀物の増産が目指され、省主導で稲麦改良事業が実施された結果、稲麦ともに優れた品種が生み出された。これらは農民の信頼を得て栽培地が拡大したが、改良品種は在来品種よりも生産コストがかかったため敬遠する農家も多かった。改良事業は一定の成果をあげたが、限界もあったのである。

第3章「蚕種改良事業」は、蚕種改良事業を通して農村社会における農業近代化の意味を検討する。浙江省では蚕糸業の国際競争力を回復するための努力が続けられ、30年代半ばには生糸生産量は順調に伸びたが、原料蚕種の改良事業は順調に進まなかった。これは、浙江省では養蚕農家が土糸（手紡綿糸）生産者をかねており、繭生産は生糸生産過程の一工程だったからである。改良種による在来種の代替は順調に進まなかった。

第4章「棉花種改良事業」は、棉花種改良事業を通して前二章と同様の問題を考察する。30年代、浙江省は細糸用原料として適する棉種への改良と増産を目指した。しかし、自作棉花を用いて手工綿布を生産していた地域では農民は在来棉に固執し、改良棉に反発した。農民が改良棉を受容するか否かは、土布業（在来綿業）の構造に規定されたのである。

第5章「アメリカ棉種の受容に見る地域差」は、第4章までで得られた知見を、全国的な視野で確認する。すなわち、30年代の南京国民政府による棉花種改良事業は、全国的に見ても、受容した地域と拒絶した地域が存在し、また一定の地域内にも差異が存在した。これもまた、各地域における土布業の再生産構造に規定されたものであった。

なお最後に「小結」が置かれ、第1篇の内容をまとめている。

続く第2編は、第1編を踏まえ、複雑な地域間分業構造を形成した華中東部の土布業を分析する。まずその前提として、第1章「土布業に関する研究動向」は、中国土布業に関する先行研究を整理する。これまでの研究は、80年代を境として、土布業が衰退したとする見方から存続・発展していたとする見方に变化したが、発展段階論に立っていたこと、また農村家内手工業が維持された原因を農村の貧困に求めた点に問題があった。今後の研究は、発展段階論的な分析に対して修正を加える方向でなされるべきだとする。

第2章「上海土布業の近代化」は、従来、低い発展段階で停滞したとされてきた上海土布業の展開を分析する。上海近郊では、19世紀に都市化が進むと、従来から栽培されてきた棉花よりもさらに収益の大きい作物として野菜や果物の栽培が普及し、棉花栽培を圧迫していった。農業生産のこのような変化に合わせて農家の副業も变化した。土布生産者は、レース編みやタオル生産に従事したり、紡織・タオル工場の賃労働者になったのである。

第3章「蘇南土布業の二極化」は、蘇南の地域経済構造を分析する。棉産地では、古くから土糸・土布生産が棉作農家内で一貫して行われ、19世紀末に洋糸（機械制綿糸）が流入

すると洋経土緯（縦糸＝洋糸，横糸＝土糸）の土布生産が維持された。綿糸を購入して土布生産を行っていた非棉産地では，洋糸流入後は洋経洋緯（縦糸・横糸ともに洋糸）の新土布業が発達したが，その後急速に衰退した。紡績工場は非棉産地に多く，生産された綿糸は棉産地の織布工場・織布農家に供給された。また棉産地で生産された土布は，非棉産地で加工された。近代蘇南の土布業は，地域間分業を形成しつつ二極化しながら発展していた。

第4章「蘇北土布業の二重性」は，蘇北の地域経済構造を分析する。20世紀の蘇北は，在来棉・土布の生産地（南通一帯），米棉栽培地（沿海部），産米地（裏下河一帯），麦作地（徐州など）に色分けすることができる。このうち特に前三者の間には，裏下河一帯の米生産量の増大が南通一帯の棉作・綿業への特化を可能にし，沿海部は，南通一帯の新土布の原料綿糸を生産する大生紗廠に米棉を供給する，という形の分業関係が成立していた。

第5章「浙江土布業の多様化」は，浙江省における土布業の展開過程について検討する。棉産地区の浙東は，洋糸流入後も従来どおり土糸・土布生産を続けたが，洋布・新土布との競争により収益が激減すると他の手工業に転向した。非棉産地区の浙西では，洋糸流入後，前貸問屋制による新土布生産が盛んになった。同じく非棉産地区の浙南も洋糸流入後は新土布生産に転換したが，ここでは手工制工場が多く設立された。浙西と浙南の差異は，洋糸流入以前から織機と織布技術が農民の間に存在したか否かが分岐点となった。

第6章「新たな手工業の興起」は，19世紀末～20世紀初頭の江南で勃興した新興手工業について考察する。新興手工業は大部分が前貸問屋制の下で行われていたが，これはその原料を機械製品や輸入品に依存していたため，前貸問屋制が最も適格的だったからである。また製品の多くが輸出に回されたことを考えれば，土布業放棄・新興手工業従事という農民の選択は，地域経済の衰退ではなく脱農化・農村工業化を意味していたと言える。

第2編の終わりにも「小結」が置かれ，内容が整理されている。またさらに，本書の最後には「結論」が置かれて本書の内容をまとめ，中国における「近代化」「資本主義化」の意味について新たな理解を提示し，今後の近代中国農村経済史研究を展望している。

3. 本書の特長と問題点

このようにまとめられる本書であるが，ここで述べられている主張，すなわち20世紀初頭の中国農村経済は小農経営的な発展過程にあり，それぞれの地域の近代における展開過程のあり方は，それぞれ固有の歴史的経過によって形成された地域経済構造によって規定されていた，という主張そのものについては，評者として全く異論がない。こうした著者の方法と主張は，すでに90年代後半以降の近代中国農村経済史研究が共有するものとなっており，評者自身，著者が作り出した新たな枠組みの中で研究を始め，著者との対話の中で研究を進めてきたからである。近代中国農村経済が停滞あるいは下降分解していたという，革命史に適合的な従来の農村経済史像を打破し，中国農村経済に内在する発展論理を探ろうとする研究の方向性は，本書に収録されている著者の一連の研究によって既定の流れとなっている。いま，本書がまとめられたことは，こうした大きな影響力を持ってきた著者の主張の全体像と展望を知る上で，大きな意味をもっているのである。

また、上記のような本書の主張が、明清時代の地方志から同時代（30年代）の調査報告に至る幅広い資料の渉獵を基礎としてなされていることも特長である。特に本書第2編は、さながら長江下流域の物産博覧会の趣がある。本書は、末尾に詳細な「地名索引」が付されていることから分かるように、江蘇・浙江の各地で営まれていた農業と手工業を一つ一つ丁寧に取り上げ、各地域の農村経済構造を再構成した上でその変遷を丹念に描く。地図を傍らに置きつつ本書を読むとき、農村における経済活動の変遷と、各地域を結ぶ物流の変化が、可視的に浮かび上がってくるようである。もちろん、多様な地域の多様な経済構造を紹介し、「多様であった」ということを結論にして終わるのでは議論はひたすら拡散してしまうだろう。しかし本書は、様々な経済構造を類型化し、あるいは地域相互の経済関係を再構成しながら、近代における中国農村経済の展開論理の提示へと議論を収斂させている。本書で紹介されている各地の具体的な事例は、それぞれが有機的に結合し本書の主張を支えているのである。事実を発掘して事足りりとせず、世界史的な視野を持った理論の構築へと向かおうとする著者の意思が、ここによく現れている。

しかしながら、本書が明らかにした中国農村経済の展開論理を世界史的にどのように位置づけるのかという問題については、評者は著者の主張に対して違和感を覚える。本書はその冒頭で、「中国農村経済の近代化過程に見出すことができる特徴の一端」を明らかにするという目的を掲げているが（p.7）、その答えが、「当該時期における中国農村経済の近代化・資本主義化は、大農場経営や富農経営として現れたのではなく、むしろ小農経営を基礎とした商業的農業や手工業の発展（農村の工業化）として現れたのである」（p.260）ということであれば、やはり本書の枠組みの問題として指摘せざるを得ないであろう。

本書は、「西欧モデル」の近代化理論（発展段階論）を基準として近代における中国農村経済を理解することを、繰り返し批判している。例えば、在来綿業に関する研究整理を行った第2部第1章では、最後の節で次のように述べている。「今後は、従来の発展段階論的な視点からの分析に対して修正を加える必要がある。従来、理論上の発展段階に適合しないズレを停滞・遅れとして認識してきたが、発展段階論はいわゆる発展の型を理論化したもので、逆に個別具体的な実態を理論化された発展段階の序列の中に位置づけ、その遅れや発展を測定する手段として用いるべきではない」（p.126）。また結論部分でも、次のように述べている。「資本主義的農業（富農）経営やマニュファクチュアの発生を農村経済における資本主義化とみなし、小農経営や家内手工業を非資本主義的生産形態であって資本主義化と対立し、それとは相容れないものだとして理解すべきではない」（p.260）。評者もこうした主張そのものについて異論はない。問題は、本書が、そうした「西欧モデル」の近代化理論に適合しない中国農村経済の特徴として、小農的發展を主張している点にある。

評者は、90年代は、小農経営の歴史上の位置づけについて世界的に大きな捉えなおしが行われた時期であったと考えている。日本近現代史では、玉真之介が、従来の日本の農業研究は、農業も工業の後を追って資本主義的生産様式へと移行するはずだとする「一つのイデオロギー」に囚われていたと批判し、小農経営を正面から捉える農業近代化論を主張した（玉真之介『農家と農地の経済学』農文協、1994年など）。西欧でも、近代における農業経

済の展開を、農業家族 (farm household) の「多就業 (pluriactivity) 」を中心に据えて理解しようとする議論が起っている (例えば , Fuller, Anthony. From Part-time Farming to Pluriactivity. *Journal of Rural Studies*, 6-4, 1990) 。また中村哲は、農業と工業との性格の相違 (例えば農業では、工業と異なり労働者が耕地の中を移動しながら労働し、また季節・天候によって労働内容が規則性を持たないなど、多人数の協業・分業の効果が工業よりもはるかに低く、家族労働力以外の他人労働力使用は労働能率の低下を招く) を踏まえ、特に集約的な農業が行われる地域では、農業近代化の完成形態は機械制小経営であると主張した (中村哲『近代世界史像の再構成』青木書店、1991年。特に第6章) 。なお、この中村の理解の中には、近代欧米の歴史的経験、すなわち 19 世紀に全盛期を迎え、農業における典型的な資本主義的生産形態であるとされてきたイギリスの「三分割制」が、19 世紀末から解体し、20 世紀には家族労働力を中心とする小農経営が復活したという歴史的経験が包含されている。このように 90 年代は、日本・西欧において、資本主義的生産様式の成立を農業経済の近代化と見なす枠組みに対して批判がなされ、小農的發展を中心に据えた理解への転換が起った時期であった。すなわち、「西欧モデル」の近代化理論に適合しないのは、近代中国だけではなく近代西欧・近代日本も同じだったのである。近代中国農村経済の展開の特徴は、小農的發展そのものにあつたのではない。近代中国農村の特徴があるとすれば、そのように西欧・中国・日本など集約的農業を行っていた地域に共通して見られる小農的發展の、その展開の仕方にこそ存在するのである。

こうした意味での小農経営の捉えなおしは、中国史の分野でも行われている。評者は上掲の諸研究に影響を受け、主として 80 年代に発表された近代中国農村経済史研究を整理して批判し、農民層分解論に依拠するのではなく、中国小経営固有の展開論理を踏まえた議論を構築する必要性を指摘した (三品英憲「近代中国農村研究における『小ブルジョアの発展論』について」『歴史学研究』735号、2000年4月) 。その上で華北の一農村の経済的変遷について再構成し、近代中国農村を特徴づける零細兼業農家の広範な存在を、男子均分相続を大きな規定要因とした中国小経営の展開論理の帰結であるとした (三品英憲「近代における華北農村の変容過程と農家経営の展開」『社会経済史学』66巻2号、2000年7月など) 。拙い主張と拙い「実証」研究であり、問題が多いことは自覚しているが、もし著者が、近代における中国農村経済の特徴が「西欧モデル」とは異なる小農的發展そのものにあり、「西欧モデル」の世界史上の (少なくとも西欧における) 有効性については前提とするのであれば、零細兼業農家を大量に生み出すような小経営の展開の仕方を中国農村経済の特徴とした、評者の主張の問題について厳しく批判して頂きたかったと思う。

また、本書のもう一つの柱である農村工業の展開過程の考察・叙述についても違和感が残った。本書は、在来の農村工業から近代的工業への展開を説明する「西欧モデル」、すなわち農家の家内手工業から前貸問屋制家内工業へ、さらにはマニユファクチュア、機械制工場へという発展段階論的な理解に対し、華中東部の農村工業の展開を踏まえて正面から批判している。ここでは、西欧や日本の近代移行期における工業の展開自体も「西欧モデル」とは異なっているという内外の研究成果を念頭に、華中東部の農村工業の展開が「西欧モデル」では説明できないことを指摘しており示唆に富む。しかし、「西欧モデル」への批判

を強く意識するがゆえに、逆に「西欧モデル」に囚われ過ぎて重要な問題が見逃された印象を否めない。例えば、第2編第3章は蘇南土布業の展開を分析し、最後に次のように述べる。「土布業の展開と機械制綿業の発生・展開との間には、関連性と非連続性を見出すことができる。すなわち、農村の土布生産者の中から織布工場の設立者が出現したわけではなく、手工制織布工場が機械制織布工場に発展していったわけでもなかったが、棉作農家の土布生産と土布商人の買付あるいは前貸問屋制の展開 土布商人による手工制織布工場の設立と従来の土糸・土布生産農民の労働者化 商人資本による機械制紡織工場の設立と従来の土布生産農民の労働者化、という流れがあったことを確認できた」(p.177)。

この部分は「と」と「 」との関係が複雑であるが、整理すれば、「前貸し問屋制+家内手工業」「商人資本による手工制織布工場+農民の労働者化」「商人資本による機械制紡織工場+農民の労働者化」ということであろう。ここではこの「 」が単線ではないという意味で発展段階論批判になっている。しかし、小農的発展論とのかかわりで言えば、さらに検討すべき問題が残されている。それは、新しく設立された手工制織布工場も機械制織布工場も、蘇南では女子労働力を雇用していたという問題である。これは棉産地も非棉産地も同様であった。とすれば、「農民の労働者化」と言っても、実際には農家経営そのものが分解したわけではなく、従来は家内のマージナルレーバーであった女子労働力が、経営の外に出て労働者になったということであろう。そしてこうした展開は、本書でも「織布従事者の半数以上が男性だったことは、土布生産者のほとんどが女性だった蘇南と対照的である」(pp.191-192)と述べられているように、蘇北・華北とは異なるものであった。こうした両地域の差異については、夙にリンダ・グローブが主として文化面から説明を加えているが(リンダ・グローブ「Mechanization and Women's Work in Early Twentieth Century China」『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院、1993年)、評者には、依然として解かれるべき問題として残されているように思われる。発展段階論を超越する近代中国農村経済の展開論理を見出す上で重要な、こうした中国小農経営における労働力の配置戦略(その地域差)、あるいは小農経営の「強靱性」をいかに捉えるかという問題は、本書においても解かれないまま残されているのである。

4. おわりに

以上、本書の内容と特長・問題点について不十分ながら指摘した。著書は同門の先輩であり、正直に言えば、本書は評者にとって非常に書評しにくい本であった。評者としてはできるだけ客観的に読み込むことを心掛けたつもりではあるが、同門ゆえの読み間違いなど含まれているであろう。著者にはご寛恕を乞うとともに、読者には、本書評にはそうした「歪み」があるということを前提に、本書評を「色眼鏡」を掛けて読んでいただくことをお願いして擲筆する。(汲古書院、2004年2月、288p、9000円+税)

(みしな ひでのり・日本学術振興会)